

2020年9月21日(月)

老球の細道563号

偉大なコーチ「山崎純男」先生の思い出(PART II)

会津バスケットボール協会 室井 富仁

山崎先生の話は反響が大きく、通信を読んでいただいている方から「次号を楽しみにしています」というメールをたくさんいただいた。そして、先生の著書『チームを創る』を多くの方々が読んでいたことを知り、改めて先生の偉大さを思い知らされた。

共同石油の体育館で出会った山崎先生の鶴鳴女子高校とは、その後平成7年の福島国体で決定的な再会をすることになった。少年女子準々決勝で福島県対長崎県(鶴鳴単独)が対戦したのである。残り7秒まで1点リードをしていた福島県は勝負を決するラストのダメ押しシュートを落とし、そのままフロントコートにボールを運ばれ、その後米国の大学に進学した「大野慎子」さんにアウトサイドシュートを決められ1点差で逆転負けを喫してしまった。たった5秒間であったが脳裏には初の全国ベスト4の夢がちらついた。勝負はタイムアップのブザーが鳴るまでわからない。夢ははかなくも散ってしまった。

試合が終わって山崎先生から話を聞いた。普段の「ハーフコート3:2」の練習で、常に4秒でシュートを打つルールで行っているのだから、タイムアウトが取れなくても選手は練習の時と同じような状態でシュートを打つことができた、と言っていた。なるほどと思い、それから私もゲームのラストセカンドタイムを設定したドリルを行うようになった。

長崎県チームはノーマークながらその後決勝まで進み、負けはしたが愛知県(現桜花学園)と素晴らしいゲームをいわき総合体育館で見せてくれた。決勝戦では、私は長崎のベンチの後ろに座って観戦した。試合前山崎先生の肩にトンボが止まっていたので、そのことを先生に指摘したところ、「トンボは心穏やかな人のところに止まり逃げないんだよ」とニヤッと笑って話してくれた。決勝戦を前にした余裕はさすが日本一の指導者であった。今でも忘れられないエピソードである。私の肩にはトンボでなくてハチやアブが止まる。残念だ。

その後、鶴鳴女子高校は山崎先生が創案した「鶴鳴モーションオフense」でさらにチーム力をバージョンアップしていた。翌年山梨インターハイがあり、会津高校に転勤した私はチームを連れて山梨に行き、インターハイの準決勝、決勝を生徒と共に観戦した。この大会も鶴鳴女子高校は決勝戦まで進み、またしても決勝で愛知の名古屋女子短大付属高校(現桜花学園)に敗退したが、タレントなどいない中で「鶴鳴モーションオフense」は切れ味鋭く今まで見たこともないすばらしいオフenseで観戦者の感動を独り占めしていた。

〈余談：山崎先生は「鶴鳴モーション」の概要を英語でまとめ、米国コーチの絶賛を受けている。そのコーチは、後に私もアメリカでお世話になるインディアナ州エバンズビル大学キャシー・ベネット H・C である。今はやりの「バックライン・デイフェンス」で2年前 NCAA トーナメントで優勝したバージニア大学 H・C トニーベネットのお姉さんである〉

鶴鳴モーションの神髄を知りたくて、若気の至りで会津での講習会を依頼した。先生は快く承諾し2回会津に来てくれた。出会いが夢の種となり、努力が夢の花となる。〈また続〉。